

# えづりこの ルーツをさぐる



## 広報えづりこ

第345号

人のうごき(5月1日現在)

人口 8,116人 (+4人)

(男 3,944人 女 4,172人)

世帯数 1,907戸

転入 42人 出生 7人

転出 42人 死亡 3人

運動会—5月3日小学校々庭



### ◎今月号の主な内容◎

- 55年度の建設事業 / 村長日誌…… (2)
- 役場仮庁舎へ移動…… (4)
- 退任・就任のあいさつ…… (6)
- ルーツをさぐる…… (7)
- 東西南北 / みんなの広場…… (8)
- かわら版 / 4月の交通違反者…… (12)



遠い昔の大むかしには、今わたしたちの住んでいたふるさと江釣子村はどこなところだったろうか。そして、ここで暮らしていた人たちは、どんな生活をしていただろうか。

こういった遠い昔のことを知らせてくれるのが、畑をたがやした時や土木工事をした時に見つかる土器や石器や遺跡です。土器も石器も、だまっただまでも話しかけてくれませんが、その土器や石器などから私達の祖先の生活ぶりを知ることができます。

もう十年近く前の事でしょうか、「はじめ人間ギャートルズ」というマンガがありました。テレビマンガにもなりましたので、知っている方も多いかと思いません。あの人たちは、岩陰に住んでいて男たちは、ヤリやオノを持ってマンモスなどの動物を追いかけ回し、女の人たちは、木の葉を採って生活していたのです。狩から帰って獲物を肴に、ガイコツになみなみとつがれた酒をグイッと飲んでいる姿や遠くで山が火を吹いている光景がマン

教育委員会がその仕事をして

るのですが、担当者の高橋文明主事と一緒に、今回から数回にわた

って、私達の偉大なる祖先の生活を探索してみたいと思います。



## ギャートルズの出現

が出て来ます。このマンガは、旧石器時代(約一万年位前までの頃)の人々の生活を描いています。

旧石器という名のとおり、彼らは土器などの焼きものを作る技術をまだ知っていません。

日本列島が大陸と陸続きだった永河期にシベリアなどに住んでい

たヘラジカ、野牛などの動物は、食料を求めて南下し日本列島にも姿を現しました。それを追って旧石器人も移動してきたと考えられています。

食料としてこれらの動物を捕獲するために、彼らは「打製石器」を武器として使いました。「打製石器」というのは、石を打ち欠いて作った道具のことで、石槍(やりの先)、石鏃(矢じり)、石斧(オノ)など多くの種類があります。

## 持川遺跡の旧石器人

持川遺跡から出土した大形打製石斧は、有名です。(本物は、文化財収蔵庫にあります。また模造

品は、県立博物館いわての夜明けのコーナーの最初に展示しています。)また、持川遺跡は、同じ石

器が七本もまともって出土したことから重要です。

持川の旧石器人は、新平などの林や野原を舞台にこの石器を持って動物を追い回したと考えられます。大きな動物を獲る時はひとりでは難しいので近所の人たちと共同で行ない、獲物はみんなで分けあったのでしょう。

狩をしない時は、みんなの道具を一ヶ所にまとめて保管していたことがうかがわれます。

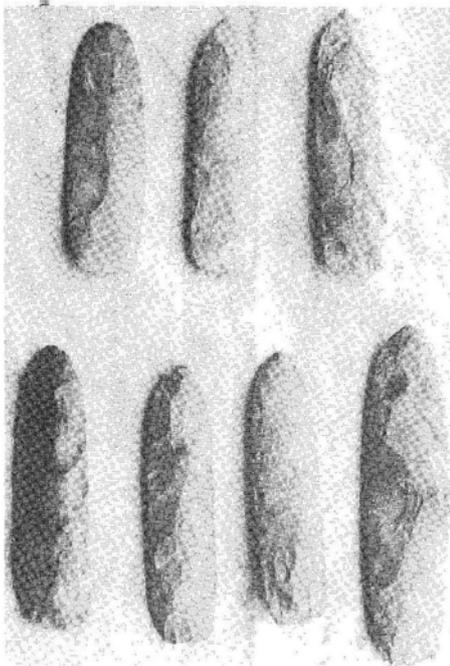
このようなくらしが、和賀地方のいくつかの地域で営まれていました。旧石器時代の遺跡をあげてみると、鳩岡崎上の台、北上市相去下成沢、藤沢、和賀町和賀仙人、夏油、湯田町大台野があります。縄文や弥生の時代と比較するとかなり少ない数です。このことから当時の人口は少なく、人口増加の

速度も遅かったことがわかります。これは、動物を獲ったり、木の葉などを採集して食料を確保するという方法が、その年どの天候によって大きく左右されるという不安定さに原因があったと思われま

すが、やがて、氷河期が終りに近づき気候が温暖になってくると、大陸から渡ってきた古い動物たちや寒い土地でしか育たない植物は姿を消し、かわって温暖な気候に適した動物や植物が姿を現してきます。旧石器時代の人たちは、いくつかの新しい技術(たとえば、弓矢や土器の発明)をおぼえながら旧来のくらしを変化させ、新しい環境の中で大きく発展していきます。

(次号へ続く)

持川遺跡の打製石斧



畑を掘っていたりすると、鍬にあたりたりして作業の邪魔になるというので、すぐにポイとすてられる「セトカケ」のほとんどが縄文土器です。縄文土器は、ヒトが化学的变化を応用してつくった、史上最初で最大の発明品なのです。

なぜ、縄文土器と呼ぶかといえば、その名のとおり土器の表面に縄をころがした様な文様がついているからです。そして、大体がこの縄文土器を使って生活していた時代を縄文時代と呼

## 縄文土器のはなし

### — 土器の発明と流れ —

縄文時代は、今から約一万年本宿遺跡から出土の縄文後期の土器（煮炊き用）

んでいます。

前から約二千三百年前までの間、約八千年間をいいます。あまり長すぎるので、五つの時代に分けて、それぞれ早期・前期・中期・後期・晩期と呼んでいます。

早期の縄文土器は、底がとんがっているもの（尖底土器）でしたが、しだいに平らな底になります。そして種類もだんだん増え、同時に製作技術も大きく進歩し、精巧な装飾をしたものも多くなります。そして、最も華麗に発達したのが、青森県津軽の木造町で発見された、晩期の亀ヶ岡式土器です。

亀ヶ岡で出土した土器と同じものが、北上市の九年橋遺跡（大通保育園付近）から大量に出土しています。あいにく、江釣子からはまだ発見されていません。

縄文前期・中期の遺跡では、新平遺跡、鳩岡崎上の台遺跡が、大遺跡として全国的にも知られています。いまでも、土器や石器を拾うことができます。

今年の三月に調査を行った本宿遺跡（一〇七号線とバイパスの交差点南側）からは、縄文後期の土器が出土しました。縄文後期の遺

跡は、県内でもあまり多くなく貴重な発見です。

縄文人の生活は、土器を使用し調理することによって、獲得する食料の範囲が飛躍的に拡大してい

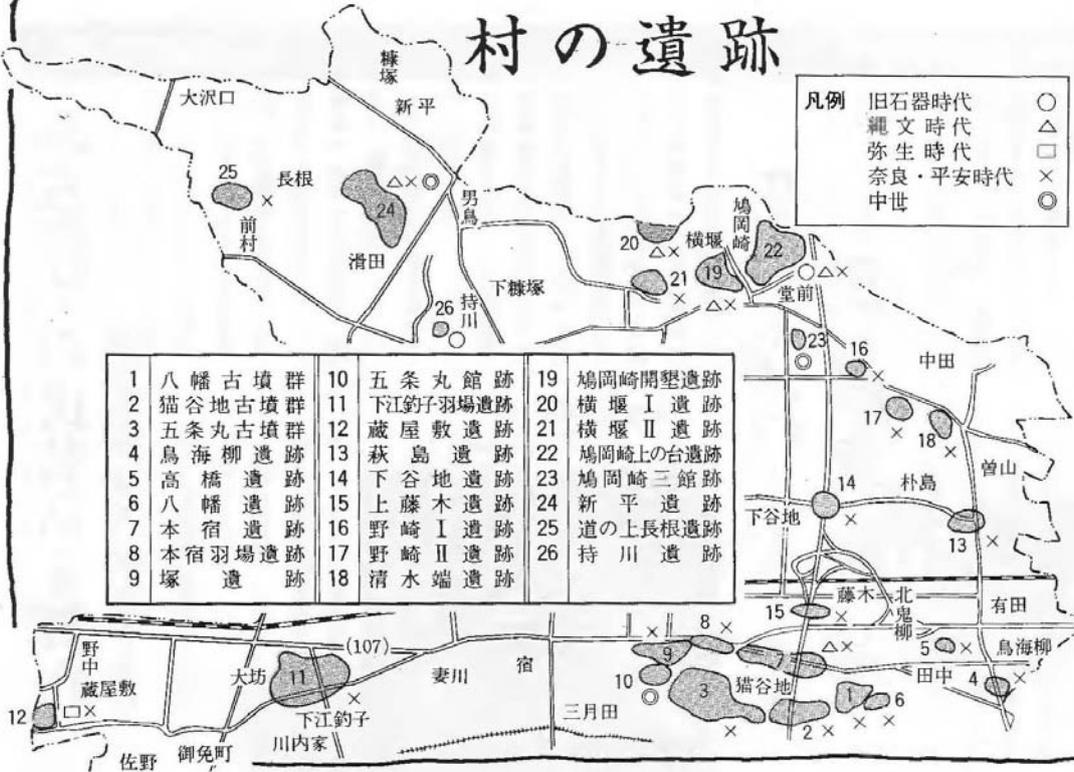
きます。

（次号へ続く）

高橋文明記

（ルーツとは、英語でROOTと書き、始祖、祖先、根源などと訳されます。）

## 村の遺跡



# ルーツをせぐる ③

「今夜は何を作ろうか」と考  
えること、「きょうはカレーラ  
イスが食べたい」と思うこと。  
つまり、食べることは人間の生  
活でいちばん重要なことです。  
食べなければ、生きていくこと  
もできません。

それでは、縄文人は何を食べ  
ていたのでしょうか。このいち  
ばん重用なことがなかなかはっ  
きりしません。それを探る方法  
は、二つあります。ひとつは、  
直接、遺された食べ物や、食べ  
物の残り（残飯）を調べる方法、

## 縄文人の食べもの

もうひとつは、調理用具、道具  
から推定していく方法です。  
海や湖に近い所に住んでいた  
人たちは、魚の他にいろいろな  
貝も食べています。その貝殻を  
一ヶ所にまとめて捨てている所  
が「貝塚」です。貝塚には、い  
つしよに捨てられた骨や木の実  
などもよく残っていますのでそ  
れらを調べたり「糞石（ウンソ  
コが石のように固くなったもの）  
」を分析し、食べた動物の毛や  
植物の種などを調べてみると、  
動物では、ハマグリなど三百種

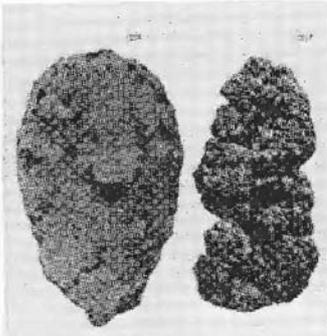
以上の貝、アジ・サケ・ノウサギ  
・シカなど（イヌは食べていない）、  
植物では、ユリ根・ヤマイモ・ヒ  
ョウタンや、ドングリ・トチ・ク  
ルミなどの木の实を食べていたよ  
うです。もちろん山菜も。つまり、  
米や麦などの穀類がないだけで、  
いまの私たちとあまり違いはあり  
ません。ただ、動物は、肉のほか  
に骨髓や脳髓を食べている場合も  
あります。植物は、人以外の動物  
も食べますので、かれらに負けな  
いで採らなくてはなりません。  
トチやドングリなど木の实はア

ク抜きをしなければ食べられませ  
んが、玄米や大麦の倍近くの高カロ  
リー食品ですから、より簡単にア  
クを抜く方法を考えることが縄文  
人の重要な研究課題だったと思  
います。木の实の食べ方は、すり石  
や石皿ですりつぶして粉にしてか

食品名	食料の100g当りのカロリー
米(玄米)	337
小麦	335
大麦	15
菜	375
チミ	625
米大白	
トル	

植物食料におけるカロリー含有量

パン状の炭化物



ら、パンやクッキーの様にして食  
べていました。北上市更木にある  
坊主峠遺跡からは、ダンゴの様に  
したものも出土しています。  
また貝塚からは、鹿の骨や魚の  
骨で作られた釣針や銚など魚具  
が出土しています。釣針は、大小  
いくつもの種類があり、釣る魚の  
種類によって使い分けられていること  
がわかります。また銚も、刺した  
魚が逃げないように銚先に紐を結  
ぶ穴がついていたり、抜けないよ  
うにカエリ（とげ）をつくったり、  
いろいろ工夫しています。

また、陸の動物を狩る時は、獲  
物の大きさによって矢じり（石鏃）  
の大きさを変えて使っています。  
また、弓矢や投槍で狩る方法以外  
に、罠を使っています。いまのと  
ころわかっている罠は、動物の通  
る道（けもの道）に、おとし穴を  
掘る方法があります。  
このようにして得た食料は、貯

蔵することがあります。特に秋に  
採ってきた木の实は土に穴を掘  
って密封貯蔵しておくことがあ  
ります。肉や貝などは、乾燥さ  
せたり燻成にして保存したので  
しょう。

果実の貯蔵に失敗し発酵した  
ことから果実酒の味をおぼえ、  
酒造りが始まったのでしょう。  
(次号へ続く)

高橋文明記  
(ルーツとは、英語でROOT  
Tと書き、始祖、祖先、根源な  
どと訳されます。)

新平遺跡出土の石皿とすり石



縄文人は、土器や石器など日常使う道具のほかに、土偶、石棒などという非日常的なものも遺しています。このことは、縄文時代の大きな特色のひとつといわれています。

初めの頃の土偶は、鳩岡崎上の台や新平から出土しています。板のように平らで立体感が

## 縄文人の祈り

あまりありません。時代が新しくなると、しだいに立体感のある土偶になり縄文晩期の土偶は特に立体的になり、遮光器形土偶といわれています。(遮光器というのは、昔エスキモーが雪や氷の反射光を避けるために使ったメガネのような道具)



遮光器形土器 (晩期)

土偶は、乳房がついていることや、妊娠の状態をあらわすようにおなかを大きくしていることから、女性をあらわしていることがわかります。

また、石棒は、新平と本宿から出土していますが、男性のシンボルをあらわしていることがわかります。

このことから、土偶も石棒も子孫の繁栄や豊穡を祀願するために作ったもの、つまり縄文人の御神体だったといわれています。縄文人は、祈りの儀式のとき、親指くらの小さな土器や特殊な形の土器などふだん使わない道具を使っています。そのうちで特に注目さ

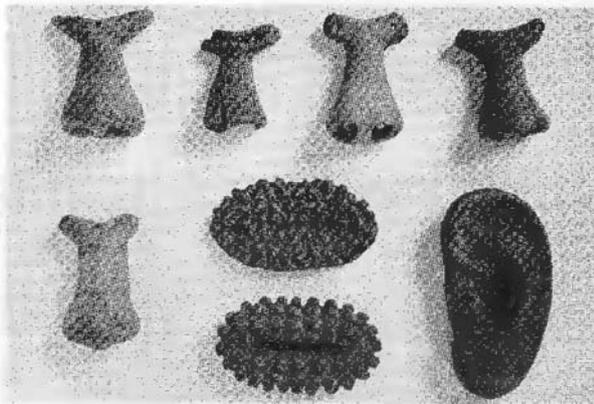


新平遺跡出土の石棒

れるのは、昭和五十一年、北上市更木にある八天遺跡から土でできた口、鼻、耳が合わせて八点発見されたことです。これらには、それぞれ紐を通す小さな穴があけられています。縄文人は、これをつけて祈りの儀式を行なったのでしようか、それとも死んだ人を埋葬するときに死んだ人の顔に被せた仮面(デスマスク)だったのでしょうか、またはつきりわかっていません。

縄文人の生活は、現代よりもまして天候に大きく左右される生活でしたので、自然に対する怖れや祈りが、食料を獲得することともに縄文人の社会をささえていたのです。

縄文晩期に最も華麗に発達した土偶が、次の時代、弥生時代になるとほとんど姿を消すのは、弥生人の生活が縄文人の生



北上市八天遺跡出土の口・鼻・耳

活から大きく変化したことを裏付けています。

(次号へ続く)

高橋文明記  
(ルーツとは、英語でROO Tと書き、始祖、祖先、根源などと訳されます。)

およそ八千年続いた縄文時代から弥生時代に移るのは、紀元前約三百年（いまから約二千三百年前）の頃です。

弥生時代は、ひとくちにいつて縄文時代からの伝統と新しく中国大陸から伝わってきた文化が交わって、飛躍的な発展をとげた時代といえます。

中国大陸から伝わってきた文化は、現在私たちが、くらして

時代です。では、実際に米作りが

どういうルートで日本に伝わったかを考えてみます。日本の古代米の種類は「ジャポニカ」と呼ばれるもので、東南アジアの長い赤米「インディカ」と種類がちがいます。「ジャポニカ」は、原産地が中国揚子江より北の地域で、そこから朝鮮半島の南部を経て伝わってきたと思われま

す。初めの頃の水田は、現在のよう

## 米作りの始まり

いく上で欠くことのできないいろいろなものの原形をかたち作っています。その中で特に重要なことは、米作りをはじめたことと金属器を作り、使うことを覚えたことです。

日本や中国など東アジアの温暖な気候の地域では、米を主食にしていますが、日本にその米作りの技術が伝わったのが弥生

な「乾田」ではなく、谷あいや平地でも洪水の危険がある水気を多く含んだ土地につくる「湿田」でした。湿田は、年中じめじめして水分を多く含んでいますので、種籾をばらまきした後、水の管理にはあまり苦労をしないわけです。そして刈入の頃に排水路で水抜きをすればよいわけです。ただ、湿地というのは、面積と土質に限界

がありますので、それ以上の発展は望めません。

弥生時代の中頃になると、弥生のムラに、ムラを代表するような人（首長）が現われ、土木技術が発達してくると、用水路を作り今まで水田にできなかった所も開田していきます。開田された水田は、湿田よりもきちんとした水管理が必要になりますので、いくつかのムラが共同で水の管理をしていたと思われま

す。この時、すでに米作りが弥生社会を支える柱になっていました。

戦前、東北地方では、弥生時代にまだ米作りが行われていなかったと思われていましたが、戦後青森県で籾痕のついた土器が出たことから、東北地方も西日本と同様に米作りが行われていたことが証明されました。

また、岩手県でも、水沢市常盤広町遺跡や、江刺市兎Ⅱ遺跡からも籾痕のついた土器が出ています。また、胆沢町清水下遺跡からは、稲刈の時に使う石包丁も出土しています。

このようなことから考えると岩手県、特に北上川を中心とする地域は西日本の地域と同じように移りかわっていったのです。今後、村内からも、弥生時代の遺跡や、水田の跡なども発見される可能性があります。

（次号へ続く）

高橋文明記

（ルーツとは、英語でROOTと書き、始祖・祖先・根源などと訳されます。）

江刺市兎Ⅱ遺跡



モミ痕のついた土器



石包丁  
胆沢町清水下遺跡



人類が死者を埋葬するように  
なつたのは、旧石器時代にさか  
のぼります。弥生時代までの埋  
葬の方法は、墓穴を掘って埋め  
るだけで墓の上には土を盛った  
り、石を置いたりするようなこ  
とを特にしていないので、埋葬  
後、他の土地と区別されること  
がなかったようです。

また、ひとりの死者のために  
必要な土地は、せいぜい長さ二  
メートル、幅六十センチメート  
ル、もあれば充分でした。  
ところが、四世紀頃になると

## 古墳と埴輪

ひとりの死者の墓としては必要  
以上に大きな面積をもち、盛り  
土をした古墳がつくられはじめ  
ます。

古墳は、それを破壊しないか  
ぎりその土地を永久に墓以外に  
利用することができません。当  
時の人々は、古墳を造ることに  
よって死者の世界と生きている  
人々の世界の違いを、土地を区  
別することで理解することがで  
きたのです。

古墳からは、葬られている人

が死後の世界でもくらししていけ  
るように、いろいろな副葬品が  
出土します。副葬品には、刀や  
馬具など鉄製品、土器、勾玉や  
ガラス玉など装飾品があります。  
古墳はそのかたちによって円  
墳、方墳、前方後円墳、前方後  
方墳、上円下方墳などに分か  
れます。

胆沢町南都田にある角塚古墳  
は日本でいちばん北にある埴輪  
をもつ前方後円墳で、長さが四  
十五メートル、高さが四・三メ  
ートルあり県内ではいちばん古  
はにわ

くて大きい古墳です。前方後円  
墳は県内では角塚古墳だけです。  
古墳の中心部は調査を行っ  
ていませんが、墳丘の周辺を調  
査して埴輪やふき石を発見して  
います。埴輪の特徴から五世紀  
の終り頃の古墳であることがわ  
かりました。このことから、当  
時、胆沢地方に強力な政治権力  
を持った人がいてその人の下で  
角塚古墳をつくれるほどの農業  
生産力があつたことがわかりま  
す。ただ、残念なことに五世紀

頃の住居跡がまだほとんど発見  
されていないので、当時の人々  
がどんな暮らしをしていたのか  
はつきりしていません。  
そして、角塚古墳以降なぜか  
県内で古墳の築造が途切れてし  
まいます。この頃の住居跡もあ  
まりはつきりしていません。  
角塚古墳から約二世紀後の、  
七世紀後半に五条丸、猫谷地な  
どの古墳群が現われてきます。  
同じ様に住居跡の数も多くなり  
ます。

(次号へ続く)  
高橋文明記

(ルーツとは、英語でROO  
Tと書き、始祖・祖先・根源な  
どと訳されます。)



角塚古墳出土

円筒埴輪



角塚古墳墳丘全景

## 世界最初の調査

テレビドラマで有名な水戸黄門は、考古学の上でも大きな業績を残しています。水戸黄門（前中納言徳川光国）は、元禄五年（いまから二百八十九年前）栃木県の上侍塚と下侍塚という二つの古墳を家臣の佐々介三郎宗淳（助さんのモデルになった人）に命じて発掘調査させています。そして出土した遺物は図面をつくった後、再び木箱に入

れていたことがわかります。

この本には、「和賀郡黒沢尻通上江釣子村・北鬼柳村に地元の人たちが蝦夷塚と呼んでいるものが所々にある。寛政九年（百八十四年前）に、この地方の代官をしていた正甫の祖父吉寛が巡回してこの村に来たときにその塚を掘っているのを見た。」と書いています。また、石室の状態や副葬品についてもくわく書いています。

この時掘った古墳がどれかは、

# 古墳の発掘

入れて埋め戻し、古墳の墳丘も整理しました。

有名なシュリーマンがトロイを発掘調査したのは、水戸黄門が発掘調査してから百八十年もたつてからのことです。

## 古文書にでてくる江釣子古墳群

村の古墳群については、南部藩士星川正甫という人が書いた「公国譚」という本に出ていることからすでに、寛政年間（約百八十一百九十年前）には知ら

現在ではわかりませんが、石室の構造や副葬品の種類から江釣

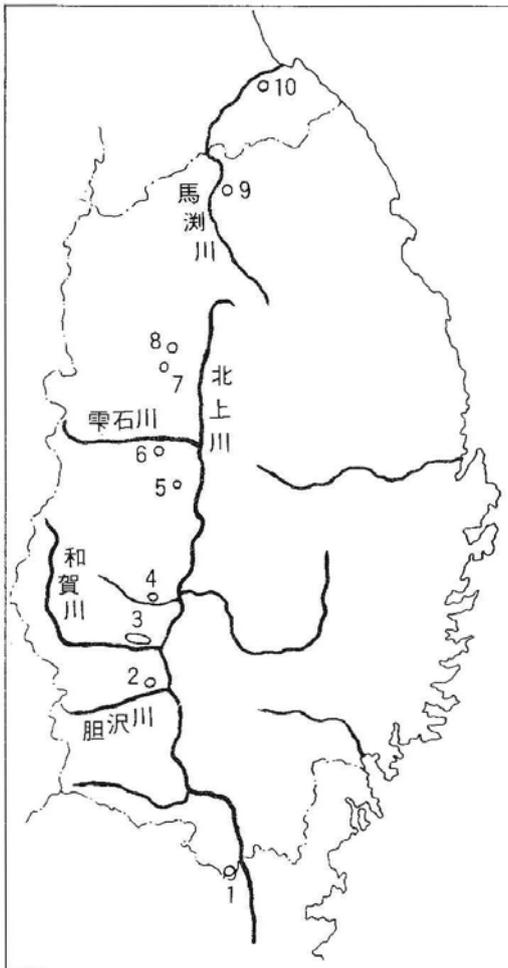
子古墳群のうちどれかであったことは間違いありません。

## 県内で最大規模の江釣子古墳群

江釣子古墳群と同じ頃の古墳群は、北上川と馬淵川沿いを中心に金ヶ崎町西根古墳群などいくつかあります。それらの多くは、長い間に壊れてしまい古墳群で数基しか残っていません。その中で、江釣子古墳群は他の古墳群と比較にならないくらい多くの古墳が残っていますので、次第に全国の人々から注目されるようになりました。

昭和二十六年に行なわれた猫谷地古墳群の発掘調査は、岩手県ではじめての発掘調査でした。

## 県内の終末期古墳群



### 凡例

1. 杉山古墳群・花泉町杉山
2. 西根古墳群・金ヶ崎町西根
3. 江釣子古墳群(猫谷地・五条丸・八幡・長沼)
4. 熊堂古墳群・花巻市上根子
5. 秋森古墳群・白沢古墳群・矢巾町藤沢・白沢
6. 太田蝦夷森古墳群・盛岡市上太田
7. 谷助平古墳群・西根町大更
8. 浮島古墳群・岩手町土川
9. 掘野古墳・二戸市福岡
10. 鹿島沢古墳群(青森県八戸市)

注 江釣子古墳群という名称は、猫谷地・五条丸・八幡および和賀町長沼の四古墳群が同時代で一連の古墳群であることから、国指定史跡になる時にこの四古墳群を総称してつけられた名称です。

### 猫谷地の発掘

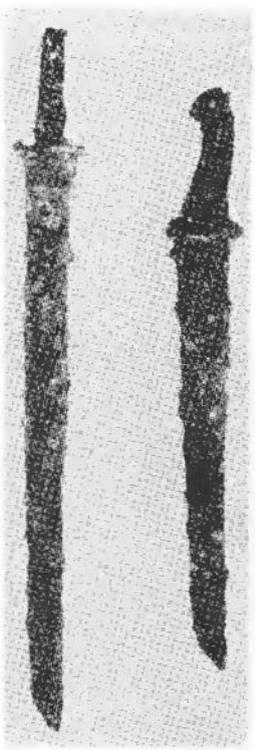
猫谷地古墳群の発掘調査は、昭和二十六年五月四日から十一日までの八日間、早稲田大学の桜井清彦教授らによって行われました。調査には、当時の黒沢尻高校や和賀高校の生徒の皆さんも協力されました。

が南北に長い長方形であり、その中に蔵手刀などの鉄製品、ガラス玉・勾玉などの装飾品および土師器が副葬されていたことがわかりました。石室は、長さ三メートル前後幅五十センチメートル前後、高さ六十〜百三十センチメートルであり、横穴式石室（横から棺を入れるように作った石室）のなごりをもっているが、簡略化し、石室上部から納棺したものであると考えられました。また、三号墳から出土した蔵手刀は、長さ六十二センチメートルのものがほとんど行われることがなかった当時、村独自で発掘調査を行ったことは画期的なことであり、文化財

## 蝦夷の長の墓

への認識の深さがうかがわれます。調査した古墳は、猫谷地の高橋文夫さん宅の南にある一号墳から五号墳までの五基でした。その結果、河原石を積み上げた石室（棺を埋めて置くところ）

ンチメートルのもので軸は朽ちていましたが、鞆尻の金具まで残っていました。また、勾玉・切子玉・ガラス玉などは、埋葬された人がひもを通してネックレスなどにして身につけていたものです。猫谷地の古墳群が**五条丸古墳群第二十号墳出土遺物**



くられたころは、石室の構造などから古墳時代末期のことです。

### 五条丸の発掘

猫谷地古墳群の発掘調査当時から注目を集めていた五条丸古墳群は、耕地整理によって破壊されることが明らかになったため、昭和三十七年に発掘調査が行われました。調査は、当時の岩手大学板橋源教授（現在・県立博物館館長）と、東北大学伊東信雄教授（現在、東北大学名誉教授）が担当され、十月から十一月まで長期間、大規模に行われました。

調査した古墳は、四十九基にのぼり、それらはすべて猫谷地古墳群と同じ形式の石室でした。さらに、周埴を発見して、古墳の規模もはつきりしました。副葬品も豊富で、蔵手刀・直刀・鉄鏃などの武器類、鉄鏃などの農耕具、馬具、勾玉などの装飾品、土器と、多種多様でした。特に鉄製品の量が多いことが注目されました。

### 古墳の被葬者

古墳群がつくられた八世紀という時代は、奈良に都があり、



猫谷古墳群第一号墳 石室羨道部内側

「あをによし 寧楽の京都は 咲く花の にほうがごとく 今盛なり」と詠われ、その繁栄をおう歌していた時代です。その頃の岩手県内はまだ、日本国家の版図に、含まれていませんでした。都人は、そこに住んでいる人たちを、天皇に従がわない者、まつろわぬ者として、「蝦夷」と呼んで、畏れ、蔑視していました。これら「蝦夷」の家族の家長たちが、猫谷地・五条丸の古墳に葬られたのです。

古墳は、なくなった人を葬る場所ですが、江釣子古墳群がつけられた頃に生きていた人々は、どんな暮らしをしていたのでしょうか。

### 住まいとムラ

まず、どんな家に住んでいたのかということですが、古代人は地面を四角に掘り込んで、その上に屋根を葺いた竪穴住居に

住んでいたことがわかっています。住居の大きさは、一辺が三メートル

八メートルくらいの長さがありますので、九十六平方メートル(約三十九坪程度)の床面積がありました。住居の中は、板壁で土砂がはいり込まないようにし、床に立てた四本の柱を基本にして茅で屋根を葺いていました。床は、板敷の部分もあったことがわかっています。壁の一方にはカマドがつくられ煙が土の中の煙突を通して住居の外に出るようにしていました。

玄関は、カマドの反対側にあったと思われれます。

このように古代人の家の構造がわかったのは、最近の発掘調査で火災にあった竪穴住居が発見され、炭になった柱や板材や茅がそのまま残っていたからです。

竪穴住居は、二、四軒がまとまって一つのグループを作っています。この様なグループがいくつあつまって古代のムラができていました。村内では、本宿、猫谷地、

塚、鳩岡崎などに古代のムラができていたことが、わかっています。

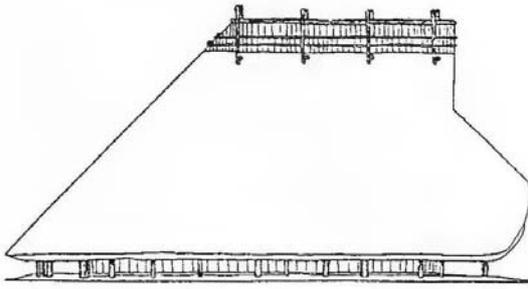
## 古代人の生活白書(その二)

### 食べ物の種類

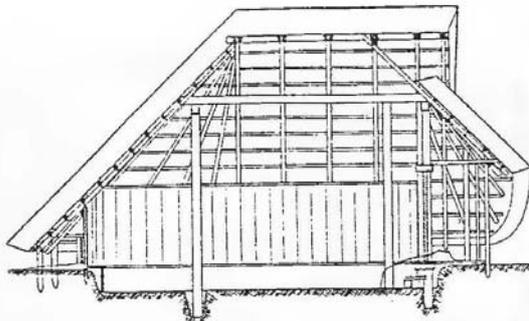
発掘調査で出土するやきものは、そのほとんどが食器など台所用品(土器)ですが、いろいろな種類があります。今の茶わんのような杯、胴の長い甕、ものを貯蔵するための壺、米などを蒸すために使う甑などです。古代にはすでに、稲などの作物を栽培していましたのでそれらを主食にしていたと思われる。

古代人は、家の中にあるカマド

で、甕で湯を沸かしその上に甑をのせて米や粟や稗を蒸して食べていました。魚や鳥やけものはもちろん、山菜、野草を食べていたことは容易に想像できます。いつの世でも欠くことのできない酒は、四種類ありました。奈良の東大寺正倉院に残っていた記録によれば、清酒・濁酒・糟湯酒・粉酒の四種類で、いずれも米穀類を原料とした醸造酒でした。清酒、濁酒は同じ種類でただ酒の澄み具合で分けたもの。糟湯酒は糟を湯に溶かしただけのもので、貧しい民衆がたしなむ酒、粉酒はいまの甘酒のよ



立図



断面図

竪穴住居跡推定復元



五条丸古墳群から出土した液体を入れた土器

うなものでした。酒は、儀式や祭礼の時に飲むこともあったが、一日の仕事が終ってから一杯で一杯?というのが一般的だったと思われます。(高橋文明記)

### 古代人の服装

古代人がどんな服を着ていたのかは、実はほとんどわかっていません。

ただ、竪穴住居などからときどき繊維に撚りをかけて紡ぐ「紡錘車」が出土しますので、織物をしていたことがわかります。その材料は、絹、麻、野生植物などの繊維でした。絹や麻袋は、律令国家への貢納物（税）として吸い上げられてしまうので、

安曇」という人の名前です。

この頃は、まだ岩手県が律令国家の枠外にあり、蝦夷独自の社会を形成していました。

岩手県が律令国家のしくみに組み込まれるのは、八世紀後半から九世紀初めにかけての約二十五年間にわたって戦われた、坂上田村麻呂を征夷大將軍とする律令国家軍と地元軍の大戦争で、地元側が敗れてからのことです。

その後、延暦二十三年（八〇四年）に「胆沢城（水沢市）」

### 古代人の生活白書（その二）

庶民（農民）が日常着用する衣服は、藤、葛、楮など野生の植物繊維を材料としていたと思われま

す。冬には、鹿など動物の皮を着用して寒さをしのいだことでしょう。

### 律令国家との関係

「和賀」という名がはじめて歴史にあらわれるのは、「続日本紀」の天平九年（七三七年）四月の条にでている「和我君計

なりました。県内で最高の律令

行政府であった鎮守府胆沢城跡からは、「納役皮……」（役（税）として皮……を納める）という木簡が発見されています。

税の負担を強いられた律令農民は、山上徳良が「貧窮問答歌」で詠ったように悲惨な生活だったので、戸籍を偽ったり、土地からの逃亡をはかるなどして、厳しい税の負担からのがれようとしてきました。

国家の基盤だった農民の疲弊は、律令体制の崩壊と平氏や源氏など武士の台頭をまねきました。

④律令国家——古代中国の法をまねた律（刑法）と令（民法・行政法）という成文法を基本として運営された奈良・平安時代の日本の国家体制。

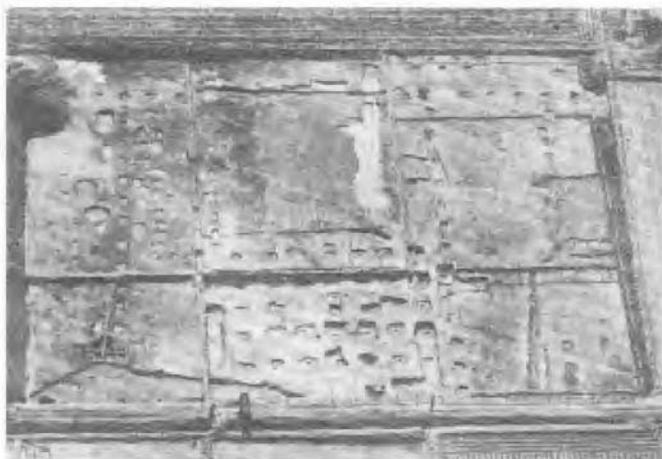
六国史——律令国家が編さんした歴史書で「日本書紀」「続日本紀」「日本後紀」「続日本紀」「日本後紀」「日本文徳天皇実録」「日本三代実録」の六書をいいます。

そのほか国が編さんした歴史書には「日本紀略」という本もあります。（次号へ続く）

高橋文明記



紡錘車・高橋遺跡出土



胆沢城跡北方官衛全景

## 稲作経営の確立

弘仁二年(八二二年)頃に「和  
我郡」がおかれたことが日本後  
紀に書かれていることは前回述  
べましたが、その後、永承六年  
(一一〇五年)に安倍頼時と源  
頼義が戦った前九年の役が起こ  
るまでの二四〇年間については、  
歴史書は何も書いていません。  
かといって、この間この地方は  
何も変化がなかったかといえは、  
そうではありません。

## 和賀発展の基盤

最大の変化は、ムラの急激な  
拡大です。それ以前までムラ(遺  
跡)がなかった所にも突然、多  
くのムラがつくられていきます。  
村内に所在している遺跡のほと  
んどがこの時期につくられたも  
のです。そして、興味深いこと  
にこの時期のムラは、現在の集  
落の下に埋もれています。これ  
は、現在の集落の原形が平安時  
代につくられたことを示してい  
ます。

ば、農業技術が発達したことに  
理由を求めることができます。  
まず、農具には鉄鋤、鉄鎌など  
鉄製農具が使用されはじめたこ  
とと、かんがい技術の習得によ  
り、古い形の湿田経営から乾田  
経営へ移行してきたことがあげら  
れます。このことにより、水田  
を含めた可耕地を大幅に増大さ  
せることができたわけです。  
水田面積の増大は、とりもな  
おさず、この地方の経済力の強  
大化を示しています。  
このように、空白の二四〇年

間は、岩手県、とりわけ和賀地  
方が経済的に急成長した時期で  
した。それと同時に、この経済  
力を背景として、地元から政治  
的有力者が台頭してきました。  
その中で最大の一族が、安倍頼  
時の一族でした。  
安倍一族は、律令体制の末端  
機構の中に組み込まれながら着  
々とその力を貯え、ついには岩  
手県全域をその勢力下におくま  
でに強大になりました。安倍一  
族のように、地元で政治的有力  
者が現われることは、律令国家

が弱体化して中世社会へ移行し  
はじめた証でもあります。

前九年の役で安倍氏が亡び、  
後三年の役で清原氏が亡び、平  
泉藤原氏が百年の繁栄を誇った  
後に、関東武士団が進出してき  
ました。中世から近世にかけて  
岩崎城を本拠として和賀を支配  
した「和賀氏」も関東武士団の中  
のひとつだったと思われます。  
和賀氏が支配した頃には、五条  
丸館、江釣子館(江釣子神社付  
近)、鳩岡崎三館などの居館が  
つくられました。おそらく和賀  
氏の家臣が住んでいたのではし  
ょう。この頃の庶民(農民)の生  
活は、まったくわかっていませ  
ん。今後、解明していかなか  
ればならない問題です。

## 文化財を守る

「遺跡」は、私たちの祖先が  
生活してきた証として、長い間  
保存されてきて現在まで残って  
います。こうして保存されてき  
ているものを私たちの子孫に伝  
え残していくことは、現在を生  
きる私たちの義務ではないでし  
ょうか。

保存され、伝えられてきてい  
るものを、現在を生き延びる私

たちが途絶えさせることがある  
とすれば、それは長い間守り伝  
えてきた祖先への背信行為であ  
り、子孫と祖先のきずなを断ち  
切ることになるのではないでし  
ょうか。  
私たちは、祖先が残してくれ  
たものを保存しているというこ  
とに誇りをもつべきだと思いま  
すし、この誇りを失なわないよ  
うにしていきたいと思えます。  
「ルーツをさぐる」は、今回  
をもちまして終了させていただきます。

(高橋文明記)



▲ 江釣子古墳群とその周辺